

夢湧く夢に夢中

第14号

令和6年12月(3)日 文責：大谷

「自分の人生 自分で生きる」

今から七年前、風邪かなと思いい病院へ。そこでは胃腸炎と言われ、帰宅。すると、容態は急変。意識を喪失し、再度病院へ。約七日後に目が覚めると、手の指や足の先が壊死(えし)していく電撃性紫斑病であるとのこと。医師と看護師らによる懸命な処置により一命は取り留めたものの、両手の指と両足を失うこととなった。

あまりにも突然にこれまでの日常が一変した横田 久世さんが、この現実とどう向き合い、そしてどのようにして今日まで生きてこられたのか。先日のPTA教育講演会で生徒の皆さんと保護者さんと一緒に、お話を聴いた。さて、当日お話を聴かれた皆さんは、どのような感想を持たれただろうか。



約七十分間の講演では、横田さんから「ポジティブワード」が次から次へと飛んでくる。もはやメモが間に合わないほどだ。そして、そんなポジティブワードのシャワーを全身に浴びていると、何だか自分の心にも熱を帯びていくのがわかった。「ポジティブな発想や言葉は、自分だけではなく周りの人をも熱く(ポジティブに)していくのか」と、無意識のうちにそう実感している自分がいて新鮮だった。そんな数々のポジティブワードの中で、私が特に印象的だった言葉は「苦しいときこそ、学びがある」だった。突然の病により両指と両足を失い、一時は「死にたい」とまで思い詰めた日々の中で、横田さんが生きるために見出した答え、それは「自分で決めること」。そこで、横田さんはマラソンへの挑戦を通じて、障がい者としての第二の人生を生きることを自分で決めたという。

「今までできていたことができなくなった」ところからの再スタート。下手くそからの練習は、想像を絶する。しかし、「自分で決めたことならば、できる」と横田さん。その言葉通り、ホルムラソンや熊本城マラソンでは、見事完走を果たされている。そんな苦しい時を経て学んでこられた言葉だからこそ、発せられる言葉の一つ一つに生命力を感じる。

また、講演の中で、横田さんから三つの宿題を課された。
(1)教室に帰ったら「ありがとう」と言うこと
(2)家に帰って「ありがとう」と言うこと
(3)寝るときに、自分に「ありがとう」と言うこと
さて、皆さんは三つの宿題を果たしましたか。
「人は自分を責めることは得意だけど、自分を褒めることを忘れないで」や「自分が幸せでないと、誰も幸せにはできない」さらに「わたしは、わたしが一番。あなたは、あなたが一番」と続けられた。そして、最後に「人生、笑ったもの勝ち」という言葉で締めくくられ講演は終了した。
講演を終えるや、手際よく競技用の義足に履き替えて生徒と体育館をジョギングしながら、保護者とのハイタッチを実体験。さながら「仮想熊本城マラソン」のようで、そこにいるすべての人たちの笑顔がはじけた。と同時に、横田さんのお話にあった「人の言葉で傷ついてる暇はない。なぜなら、わたしにはやりたいたいことがあるから」「わたしは、マラソンを走ること、みんなの笑顔が見たい」とは、このことだったのかと思ひ、自分の人生を、自分で決めてきたその生き方そのものが、まさに「夢に夢中な人生」なのだろうと思った。わたしも夢に夢中になれる人生を、今からでも自分で決めたいと思った。だから、「今日も三つの宿題をやるう」と決めた。言われたからではなく。



■先日の授業参観、PTA教育講演会及び学年・学級懇談会には、お忙しい中多数お越しいただきありがとうございました。あつという間に2学期も残りわずかとなりましたが、新年に向けて、引き続き、ご協力をお願いいたします。